

志賀直哉「或る一夜」論
-武者小路実篤、有島生馬との関係を中心に-

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学文学部・文学研究科 公開日: 2019-07-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 柳澤, 広識 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/20210

志賀直哉「或る一夜」論

—武者小路実篤、有島生馬との関係を中心に—

柳澤 広識

要旨

志賀直哉「或る一夜」(『新小説』、大正九年一月)は、主人公の謙吉が常道という親友の失恋を知り、石川・山上という友人たちとこのことについて話す、山上の態度に不快になる物語である。しかし、同時代評において南部修太郎が「余りにフラグメンタルであり過ぎはしまいか」(『失望した志賀氏の作品』、『時事新報』、大正九年一月十四日)と批判しているように、断片的な内容であり、十分に物語が読者に伝わるような小説ではない。そのために、これまでの研究でも等閑に付されてきたと言える。明治四十四年六月二十五日、武者小路実篤は日吉タカ(『お目出たき人』の鶴のモデル)に最終的に求婚を断られたのだが、それが作品の題材となっている。そのため武者小路実篤研究で言及されることもあるが、作中の山上が有島生馬をモデルにしていることから、生馬との関連で触れられることも多い。早くは須藤松雄が「蝕まれた友情」(『世界』、昭和二十二年一月から四月)に関係づけて有島生馬の存在を重視している。しかし、これまでに単独の作品として読解を行った論考はない。「或る一夜」の内容は、未定稿129「或る旅行記 青木と志賀と、

及び其周囲。」に実名で書かれているものと一致する。本稿では「或る旅行記」を草稿に位置づけた上で、以下の考察を行う。まず、「或る旅行記」との比較から、作中人物のモデルを特定する。武者小路実篤、有島生馬、有島武郎といった主要な人物は当然だが、高島平三郎や原田照子などその他の人物にも着目し、その経歴などを精査した。高島平三郎は武者小路との関係が深いが、『白樺』刊行の経緯にも関わりのある人物であり、看過できない。また、作中に引用されている唄の歌詞も同時代の文献から引用することで、その効果を明らかにした。本文に「ラスト・ローズ・オブ・サンマー」と「ホーム・スキート・ホーム」という曲名がみられるが、両曲ともに唱歌として広く知られていたものである。

また、「或る旅行記」との差異としては、武者小路への同情が全面的に押し出された一方で、有島生馬への批判が強まっている点が挙げられる。「或る旅行記」には「武者のやうに執着の強い、邪推深い、何所か顔にも声にも悲しい影を持った男に執念深く思はれたら、女の性格によつたら恐しくなるだらう、と彼はこんな事を考へた」と、相手の女性の心情を想像する文章もあるが、それらは「或る一夜」では削られている。一方で生馬の立場を思いやる記述もあつたが、それらも削除されている。生馬の立場を考察する上で、生馬の妻である原田信子および原田家についても精査した。

最後に、「暗夜行路」との関連について言及した。「暗夜行路」の前身と目される長篇小説は、『白樺』のあとで『新小説』が掲載先として想定されていたと思われる。「或る一夜」は『新小説』に発表されているが、小宮豊隆との関係も考察の対象とし、「暗夜行路」との関連を検討した。

キーワード：武者小路実篤、有島生馬、モデルと友情

はじめに

志賀直哉「或る一夜」は、大正九年一月、『新小説』に発表された。明治四十四年六月二十五日に、武者小路実篤は『お目出たき人』（洛陽堂、明治四十四年二月）の鶴のモデルである日吉タカに最終的に求婚を断られるのであるが、その事実が作品の素材となつている。明治四十四年六月三十日の志賀直哉日記には次のような記述がある。

此月の廿五日に武者のお目出度人の鶴は遂に明らかに断はつて来た。武者が外にあらはしてゐる悲しみよりも多く自分はショックを受けた。武者は打撃を受けてゐるに相違ない。／此月は此事件が自分に最も大きかつた。

（傍線引用者、以下同。）

ここには直哉の武者小路に対する同情が読み取れる。体験からおよそ十年を経て、作品として発表されたのである。

大正九年一月には、直哉は他にも多くの小説を発表している。『新潮』に「謙作の追憶」、「白樺」に「小僧の神様」、「雄弁」に「夢」、「金の船」に「菜の花と小娘」を発表しており、『大阪毎日新聞』夕刊で「或る男、其姉の死」の連載もはじまる。「謙作の追憶」は「暗夜行路」(『改造』、大正十年一月)に「序詞(主人公の追憶)」として組み込まれるため、これまでも多く研究の対象とされてきた。「小僧の神様」は直哉の代表作として、また「菜の花と小娘」は処女作のひとつとして、両作ともに多くの先行論がある。「或る男、其姉の死」も「和解」三部作のひとつとして重視されてきた。「夢」は例外であるが、「或る一夜」はこれまでにほとんど論じられてこなかった作品と言える。

先行研究の少なさに比べて、同時代では「或る一夜」に一定

の注意が払われているものの、その評価は総じて低い。以下、同時代評を丁寧に紹介したい。「或る一夜」のような小品とも呼べる小説にも多くの同時代評が残されていることは、大正九年における直哉への注目度の高さを示していると思われる。

南部修太郎は「失望した志賀氏の作品」(『時事新報』、大正九年一月十四日)において、その題の通り、「或る一夜」には可成り失望させられた」と述べ、「肝心の作の主人公の心持を描く氏の筆致は簡潔の域を越えて、余りにフラグメンタルであり過ぎはしまいか」と批判している。ただし、南部が「志賀直哉氏の短篇となると、殆ど理屈抜きに讃嘆してゐる私も」と前置きしていることには注意したい。評価の低さは、期待との落差に起因していると言えよう。

「或る一夜」が余りにも断片的にすぎるといふ評価は、宮島新三郎「新春文壇の印象(二)」(『国民新聞』、大正九年一月四日)でも共通してみられる。宮島は主人公の気持ちだが、「読む私達には、僅かに説明の一脈に依つて伝へられてゐるだけ」であり、「深く鋭く響いて来るといふ所までは達してゐない」と読んでいる。宮島が「主人公の気持は作者の頭では可なりはつきり作られてゐるやうに思はれる」と述べていることは、読者には情報が少なく作者の真意が読み取れないという意味であろう。

岡田三郎「新春文壇の概評」(『太陽』、大正九年二月)は「或る結婚不調問題を中心にして、第三者達の心を一寸覗かせた、一見鋭いやうな、如何にも志賀氏らしい作品」であると述べ、「好箇の小品」だと一定の評価を与えているものの、「大した深い複雑味もなければ、暗示にも乏しい」としている。その際、「謙作の追憶」と比較されることで「或る一夜」が読まれていることには注意したい。岡田の評価に反して、広津和郎は「謙作の追憶」、「夢」、「或る一夜」の三篇を読んだ上で、「或る一夜」に注目している。広津の「新春文壇の印象」(『新潮』、大正九年二月)では、三篇を読んだが「余りにも平凡」であり「他の作

にあつたやうな心の動きが感じられない、「停滞した感じがする」という。広津は三篇のなかでは「或る一夜」に「心を惹かれ」ており、「自分だけの記録のために、書き残して置かうとしたやうなものらしい」と推測している。たしかに断片的な内容を加味すれば、「暗夜行路」のように短編を発表することで長い物語を作ろうとしていたようにも思える。このことについては後述する。

本間久雄¹は「正月文壇の印象」(『早稲田文学』、大正九年二月)で、主人公の謙吉について、「何と云ふ近代人であらう! 何といふ感覺主義者であらう! 何といふ焦燥不満に囚はれた人物であらう! そして又何といふ自我主義者であらう!」と述べている。ここで「自我主義者」という言葉に注意したい。大正九年の時点ですでに志賀直哉の作風は「自我主義」的であると規定されているのである。本間は「今少しひろい伸びやかな心持ちで環境に對することが出来ないものであらうか」と主人公の心持ちを批判的に読んでいる。

同時代に共通する「フラグメンタルであり過ぎ」という印象は、先行研究が少ない要因としても考えられよう。「或る一夜」を単独で論じたものはない。作中人物のモデルである有島生馬と直哉の関係を論じる際に言及されるのみである。早くは本多秋五²が「志賀さんの『或る一夜』が、武者小路さんのことを書いたものだということは、誰に確かめたものでもない。私の想像である。あの小説が事実そのままを書いたものだという証拠もない」と常道と武者小路を初めて結びつけている。また、須藤松雄³は「山上」は、おそらく有島生馬氏をモデルにしている」と指摘し、「蝕まれた友情」(『世界』、昭和二十二年一月から四月)に関係づけて有島生馬の存在を重視している。「作者と同様、ゆたかに生活するものの陥りがちな傾向であるだけに作者はきらう」と論じ、生馬への直哉の批判を読み取っていることは示唆に富む。また、宮越勉⁴は「直哉の生馬に對するその友情の龜

裂感から生じる悪感情は、長い期間に渡り熾りつづけ、「或る一夜」の発表時点でいわば小規模の噴火をみせ、そして戦後の「蝕まれた友情」の発表時点で大爆発をみせた」とし、生馬と直哉の友情という観点から「或る一夜」に触れている。

「或る一夜」の草稿としては、未定稿¹²⁹「或る旅行記 青木と志賀と、及び其周囲」(以下、「或る旅行記」と表記)がある。「或る旅行記」は明治四十五年一月から四月にかけて執筆されたと推定されるが、そこには「大津順吉」(『中央公論』、大正元年九月)の素材となった女中事件のことも書かれており、後年に発表された「廿代一面」(『新小説』、大正十二年一月)の草稿にも位置づけられる。「或る一夜」は「廿代一面」とともに、友達をモデルとした小説であり、直哉は明治四十五年一月三日の日記に「友達をモデルにして書けば不快な事が起る」と記しつつも、「或る旅行記」の執筆を続けている。複数の友達を描くという方法から見れば、「或る一夜」も「廿代一面」も「暗夜行路」との関連を指摘できよう。実際に「廿代一面」の同時代評では「暗夜行路」と似たりよつたり位な表現方法」と指摘されているのである⁵。

本稿では、まず「或る旅行記」との比較から作中人物のモデルや作品の背景を考察する。基礎研究を行ったうえで、作品読解を行う。その際、定稿に至る過程で削除された記述に注意する。また、『新小説』に発表されたことを重視し、「暗夜行路」との関係も考えたい。

一 作品背景について

まずは作中人物のモデルを特定したい。「或る旅行記」は登場人物がすべて実名で書かれているため、「或る一夜」と照合することでそのモデルがわかる。

- 謙吉↓志賀直哉
- 常道↓武者小路実篤
- 石川↓有島武郎
- 山上貞一↓有島生馬
- 山上慶子(山上の細君)↓原田信子(生馬の妻)
- 勇(細君の弟)↓原田熊雄(信子の兄)
- 細君の母↓原田照子(信子の母)

冒頭で謙吉に常道の失恋を伝える「友の一人」は園池公致、また手紙で言及される紳は柳宗悦である。手紙で出てくる山添先生は高島平三郎である。高島平三郎は「お目出たき人」の川路のモデルとされる人物で、武者小路と関係が深い。

高島平三郎について、武者小路の「高島平三郎先生」(『高島先生教育報国六十年』、高島先生教育報国六十年記念会、昭和十五年十一月)を参照すると、武者小路が「五つ位の時、僕の兄(引用者注II武者小路公共)が学習院の初等科(小学校)一年に入った時、受け持ちの先生が、高島先生だった」のであり、夫を失っていた「母は兄の教育に就て万事先生に御相談した」という。また、「白樺を出すことにきめた時も、出版所になつてもらう本屋をさがした結果、僕が先生の処で洛陽堂の主人、河本龜之助氏と知りあつてゐる話を皆にして洛陽堂に出版所になつてもらうことにした」と記されており、『白樺』とも縁のある人物である。武者小路は高島平三郎と幼い頃から知り合ひであり、それ故に日吉タカとの交渉を任せたのであろう。

本文の「青白く強い瓦斯の光の一杯にみなぎつた部屋に山上夫婦、石川、それから山上の細君の母と弟とが談笑してゐた」という文章は、「或る旅行記」では「十畳の客間には武郎夫婦、有嶋夫婦、原田の親子と有嶋の末の弟の行郎とがゐた」というものに相当する。ここから、作品化にあたって、有島武郎の妻・

神尾安子が削られ、原田熊雄と有島行郎が一人の人物(細君の弟)に変更されていると理解できる。後述するが、石川(モデルは有島武郎)が夫婦でなくなつたことは、山上(モデルは有島生馬)の「家庭の団欒」を強調するためであつたと思われる。

作品背景として、登場人物の他に音楽に着目したい。冒頭で謙吉は「華族会館の或る音楽会」に参加しているが、この音楽会は音楽奨励会のことである。「或る旅行記」には「音楽ショウレー会といふ、彼等のやつてる白樺といふ雑誌と多少縁故のある音楽会」と明記されている。音楽奨励会は、明治四十三年九月に田村寛貞など学習院関係者が中心となり発足した会である。梶谷崇⁷は、「音楽奨励会は貴族の音楽保護を目的とした会とみなされていたのであり、かつ彼ら自身もある程度は貴族的な性格を意識していたものと考えられる」と述べており、「音楽奨励会に協力することを明言していた白樺派は一年も経たないうちに奨励会と距離をとり始め」たという。その理由は、「柳によれば、奨励会は芸術家に対する尊敬が足りず、道具として扱ひ、かつ雰囲気に芸術的などころがないばかりか、利害関係ばかりが見出されるような会である」からだとしている。つまり、音楽奨励会は「貴族的な性格」であつてそれが肌になかなか『白樺』の同人は離れていった。特に柳宗悦は、兼子(のちに二人は結婚)と会う機会として出席はしていたが、内心は田村寛貞の音楽観などに反発していたのである。芸術家の人格を重視する柳に対して、田村は「音楽以外の要素から導き出される解釈を冷淡なまでに排し、音楽の美は音楽そのもののみ存在する」という自律的形式美学⁸を重視する。作中では「華族会館の或る音楽会」と表現されている。それは小説にする際の作法とも受け取れるが、「音楽奨励会」と『白樺』の関係への配慮も含まれているのではないか。「或る一夜」はモデルへの過度の配慮(デフォルメによつて読者がモデルを特定できないこと)がなされているが、それは冒頭の音楽会にも指摘できる。

音楽に関しては、本文に「ラスト・ローズ・オブ・サンマー」と「ホーム・スキート・ホーム」という曲名がみられる。両曲ともに唱歌として広く知られていたものである。

「ラスト・ローズ・オブ・サンマー」(＝「The Last Rose of Summer」)、「夏の最後のバラ」は「菊」や「庭の千草」として知られている。原曲はアイルランドの民謡で、アイルランドの詩人ムーア (Thomas Moore) が作詞したものである。明治十七年三月に『小学唱歌集 (三)』に収録されている。その歌詞と訳の一部を次に示す。

THE LAST ROSE OF SUMMER.

'Tis the last rose of summer,
Left blooming alone;
All her lovely companions
Are faded and gone;
No flower of her kindred,
No rosebud is night,
To reflect back her blushes,
Or give sigh for sigh.

こは孤り 咲きて残れる
夏の日の 名残りの薔薇。
愛らしき 友だちはみな
色褪せて 洞み果てたり、
紅らめる 顔映し
諸共に 嘆き交はさん
一類の 花も蕾も
辺りには 匂ひてあらず。

「ホーム・スキート・ホーム」(＝「Home, sweet home」)は「埴生の宿」として知られている。作詞はアメリカの劇作家ヘイン (John Howard Payne) であり、作曲はビショップ (Sir H. R. Bishop) による。「埴生の宿」は明治二十二年十二月に『中等唱歌集』に収録された。こちらも歌詞と訳の一部を次に示す。

HOME, SWEET HOME.

'Mid pleasures and palaces though we may roam,
Be it ever so humble, there's no place like home!
A charm from the skies seems to hallow us there,
Which, seek through the world, is ne'er met with
elsewhere.
Home! home! sweet home!
There's no place like home!

宮居の裡に
歓楽つくすも
いと賤しとも
家こそよけれ
天来力は我等を
浄むるならめ、
何地索むと
あはれぬ力、
家なれや家快し家よ
家に比べんところあらじ。

謙吉は「ラスト・ローズ・オブ・サンマー」から「何と云ふ事なし」に「ホーム・スキート・ホーム」を想起している。歌詞の内容はまったく異なるため、おそらく曲調の類似から連想

したのである。山上の家庭が「月並にスキー・ホーム」であるということ表現するための連想でもあったと言えよう。

二 常道への同情と山上への批判

「或る一夜」では謙吉の全面的な常道への同情が読み取れる。常道が「先の家からたうとう、はつきりと断わられた」ことを聞いたのち、謙作は「自分の捕へられてゐる気分と、音楽から誘はれる気分との起す不調和」に耐え切れずに会場を出る。謙吉は常道の「如何にも調子の低い手紙」を読んで「奥床しいやうな、何か悲壮な感じに捕へられて」涙ぐんだのである。しかし、「或る旅行記」には全面的な同情ではなく、武者小路（常道）への批判的な視線も含まれていた。たとえば、「或る旅行記」には「武者のやうに執着の強い、邪推深い、何所か顔にも声にも悲しい影を持った男に執念深く思はれたら、女の性格によつたら恐しくなるだらう、と彼はこんな事を考へた」と、相手の女性の心情を想像する文章もある。また、武者小路との関係で重要な点が次の文章にみられる。

志賀は武者に対する一種の親しみから心に実際思つてゐる以上憤慨したやうな口吻をもらしたと自分でも思つた。然し、こんな事をいひながら彼は彼の此言葉を聴いた武者の「女遊びに有頂天になつてゐるやうな人間に自分のラヴ、アツフェヤーに關係されてたまるものか」といふ様子をマザ／＼と眼に浮べたら、「畜生、勝手にしやがれ」といふやうな気になつた。

「女遊び」に関する直哉と武者小路の相違がここで言及されている。「或る旅行記」には留学中の有島生馬から「モデルとの

關係を打明けた長い手紙」が来たこと、それによつて「女遊び」に対する志賀の考えが変わつていったことなどが書かれている。「女遊び」を始めた直哉は武者小路とそれまでにはなかつた距離を感じるようになる。「志賀は自分が女遊びをしないまでは、武者から同じ感じを受けても、それを好意に解する余裕がいくらもあつた」が、「女遊び」を始めてからは「美しい恋に余り口バシを入れて貰ひたくない」というやうな武者小路の態度を意識するやうになつたのである。「廿代一面」では作中で仁木（モデルは三浦直介）の恋愛が語られているが、仁木の恋愛に対して積極的に交渉を務めているのは重見（武者小路）と紳（柳宗悦）であるとされている。そのような隔たりは「女遊び」がひとつの要因となつてゐると思われる。また、「或る旅行記」が明治四十五年一月から四月にかけて執筆されていることにも注意したい。明治四十四年十一月に、直哉と武者小路は平澤仲次（長興善郎）「西京行き」（『白樺』、明治四十四年十二月）をめぐつて対立している。「暗夜行路草稿13」（大正元年十一月以降に執筆されたと推定）を参照すると、「西京行」といふ小品に近しい作の批評について順吉（直哉）が「客観的な観方がしてあると尚よかつたかも知れない」と発言すると、重見（武者小路）は「それのない所がいゝんだと思ふんだ」と「戦をいどむやうな底力をこめて」反論する。順吉は「絶交を意味する手紙」を送るが、重見が「割りに強い言葉で順吉を讃めた」ことで両者は和解している。「或る旅行記」での武者小路への批判的ともとれる文章には、そのような衝突の影響が響いてゐるのかもしれない。大正九年の発表時には全面的な同情になつており、その間の直哉と武者小路の友情も考慮せねばならないだろう。一方、有島生馬への批判は本文にも見出せる。山上の家庭に対しては本文で「変に堪へがたく、ダルで、不愉快」とされているが、日記を参照すれば直哉が生馬の家庭に対して抱いてきた感情と同じものであることがわかる。生馬は明治三十八年

五月にイタリヤへ留学したが、その際、婚約者となっていた関安子（「蝕まれた友情」の安井関子のモデル）のことを直哉と黒木三次に託していたのであった。しかし、明治四十三年二月に帰国したのち、間もなく、生馬は関安子との婚約を解消してしまふ。そして明治四十三年十一月には原田豊吉・照子の娘である信子と結婚する。

ここで原田家について詳述しておきたい¹⁰。原田家は鴨方藩（岡山支藩）の藩医であった。原田豊吉の父、原田一道は天保元年に鴨方藩御典医の原田碩斎の長男として生まれた。伊東玄朴に蘭学を学び、のちにオランダ陸軍士官学校に入学。明治六年七月に陸軍大佐に任ぜられた。造兵司分科・参謀局第一課長・砲兵会議副議長・砲兵局長を経て、明治十四年七月には陸軍少将に進級する。その後、明治二十三年には貴族院議員を務め、明治三十三年に男爵に叙された。原田豊吉は一道の長男である。豊吉はドイツ留学後、明治十九年には東京帝国大学の地質学教授となり、日本の地質学の基礎を築くが、明治二十七年に若くして亡くなっている。豊吉の没後に原田家は男爵となったのである。余談であるが、一道の次男は原田直次郎であり、ミュンヘンで森鷗外と出会い、終生の友となっている。直次郎は、鷗外の「うたかたの記」（『柵草子』、明治二十三年八月）に登場する日本人画家・巨勢のモデルと言われている¹¹。

原田一道は明治四十二年に死去しており、明治四十三年には孫（豊吉の息子）である熊雄が男爵を継ぐ。そのため、作中の時代を明治四十四年六月二十五日とした場合、勇のモデルである熊雄はすでに男爵となっている。

信子・熊雄の母である照子は、明治元年十二月に、ドイツ人の兵器輸入商であったマルティン・ミカエル・ベアと荒井ろくとの間に生まれた。ドイツ人と日本人のハーフであり、そのため照子はドイツ語も話していただろうと推測される。ベアは一道と知り合っており、豊吉がドイツに留学する際にもベアの

助言があったという。豊吉と照子は幼い頃からの知り合いであったが、結婚に際して照子は高田慎蔵の養女となっている。「或る旅行記」には「志賀だけはふだんから此母を嫌ひだった」とあり、直哉が照子を嫌っていることが書かれている。志賀直哉日記を参照すると、明治四十四年一月十三日の記事に次のようにある。

病院の帰途伊吾の所へよる。正月に伊吾の書いたものが、原田未亡人の氣にふれたのを有島が真ともに伊吾に小言をいつた話を聞いた。／伊吾は有島の事を、スレたロマンティックだといつてカナリ不平らしかった。小説を書くといふ事を許したら何を書かうとそこまで干渉されてはたまらない。少なくとも「老ひたる母の眼」を以つて直ぐ他人を見たがる有島の忠告がシニククになつてゐる伊吾には余りに不用意だつたに相違ない。

「正月に伊吾の書いたもの」とは、里見弴の「二月―四月」『白樺』、明治四十四年一月）を指している。これは墮胎を扱った作品であり、「暗夜行路草稿13」などに繰り返し書かれた事件を題材としたものであるが、それについて照子が苦言を呈したことがわかる。その苦言から生馬が里見弴に注意したことを直哉は快く思っていなかったのではないか。その経緯は、里見弴の「君と私と」『白樺』、大正二年四月から七月）に以下のよう書かれている。

「白樺」の正月号に、私は情婦から流産と聞かされた胎児の死骸を密かに埋めに行く男の心持を中心にして書いた。俊之助兄（引用者注）生馬がモデル）の細君の母親は文学や美術にも趣味をもつた人で、「白樺」も月号見てゐたが、私のこの作ではヒドく感情を害して了つた。ゾラやモウパ

ツサンのやうな人ならいざ知らず、青二才の作者がやたらに取扱ふべき材料ではない、かう云つて、以後「白樺」には手を触れまいとまでいきり立つた。この、所謂しツかり者の未亡人に就いて、兄は常から「若し男だつたら大臣以上だネ」などと云つてゐたが、——その人の腹だちをそのまゝ私へ伝へて聞かせた。／＼それアお気の毒だつたネ。一人でも月極購読者をへらしたとなると、雑誌の方にも申訳ないわけだし……／＼私もムツとして、そのくせわざとこんな冷かな返事をした。(五十七)

兄である生馬が過度に干渉してくることを、里見弴は不快に思うこともあつたのであろう。ここで注意すべきは、照子の意見で生馬が創作に口を出している点である。後にも述べるが、作中では山上の芸術に対する態度が批判されていると思われる。里見弴の創作に照子の意見を汲んで苦言を呈すような生馬への不快がその底流にあるといえよう。生馬の家庭については、明治四十四年四月六日の日記にも次のような記述がある。

午后有島の所へ行つて、信子氏のピアノを聞いた。／＼有島は信子がかういつてゐたよ、と自分の余り愉快には感じない事を自分につげた。自分は一寸不愉快を感じたが、直ぐ有島の呑気な部分の性質を可笑しくも思つた。信子といふ人を捕えた有島は今細君と細君の母とに捕えられた人間といふ感がある。自分はあゝいふ家庭とか細君とか、状態には堪えられさうもない。

『明治文学全集 76 初期白樺派文学集』(筑摩書房、一九七三年十二月)の有島生馬年譜を参照すると、明治四十四年八月二十日に生馬と信子には長女の暁子が誕生している。そのため、「或る旅行記」には記述されていないが、作中でモデルとなつ

ている信子は妊娠していた可能性が高い。まさに「楽しい家庭の団欒」といった雰囲気であつたであらう。「或る旅行記」の欄外には、「有嶋の位置に自分がゐたら、自分はそれ以上にダラケてゐたかも知れない 又妻君(マコ)に対する愛情も自分にはわからないのである、だから、今考へて彼を悪くは思へないが其時は左う感じたのである」と、生馬の立場に配慮する書き込みもみられる。しかし、それは「或る一夜」では削られ、山上への批判に焦点が絞られるのである。本文では、「細君が来て山上が急に音楽通になつた」と語られているように、山上は嗜好にまで家庭の影響が出ている人物である。また、シヨパンについて「あのメロディーをヴァリアシオンで続けて行くんだ」と発言しているように、形式から音楽を理解している。それは田村寛貞の「自律的形式美学」に近いように思われる。さらに、山上は常道の小説について「どうせ破れるものなら、送つて、スヴニールにするだけでもいいぢやないか」と言っている。ここでは常道の小説を「スヴニール」(イタリア語で「お土産」という意味)にするだけでもいいと発言しており、芸術として扱っているとは思われない。本文の末尾で謙吉は「山上のゆるみ切つた気持が後まで不快に残つて居た」のであるが、その「ゆるみ切つた気持」とは芸術に関するものも含まれているのであろう。生馬の芸術観に対する批判は、戦後に発表された「蝕まれた友情」ではより直接的に表現されることになる。「蝕まれた友情」の三には次のような記述がある。

かういふ事、総ては「生活を愛する」といふ考へから出て来た事だ。君はそれで徹底した。君の芸術は君の「生活を愛する」為め的手段で、最早、露骨に、目的ではなくなつた。君は僕達の芸術への熱情を嗤ふばかりでなく、芸術といふものに対し、段々偶像破壊的な気持になつて行つた。

ただし、このような批判は飽くまでも「蝕まれた友情」発表時の直哉が抱いていたものであり、全面的に肯定されるような意見ではないといえよう。たとえば目野由希¹²は「戦争画にも大衆文化／文化の大衆化にも、ほとんど取り組まなかった彼（引用者注Ⅱ生馬）である」と生馬を評価しており、太平洋戦争中の活動についても、「戦争や侵略というテーマを回避し続けた彼の穏健で知的な外交姿勢とその手法は、現代知識人が文化政策に協力する際の姿勢と手法と、寸分の違いもない」と一定の擁護を行っているのである。直哉の側に限って言えば、「蝕まれた友情」で顕著に現れる生馬の芸術観に対する批判は、「或る一夜」にその萌芽が表われていると読むことは可能であろう。

三 「暗夜行路」との関連

「或る旅行記」と「或る一夜」の内容を比較すると、多くのデフォルメが行われていることが理解できる。ここで謙吉の住んでいる場所に注目したい。「或る旅行記」では志賀は「二三年経験しなかつた興奮を一方に味ひながら急ぎ足で麻布の自家へ帰つて来た」と書かれていた。直哉の住所は、明治四十四年には麻布三河台町であり、「或る一夜」発表の大正九年には我孫子に住んでいる。しかし、「或る一夜」では「彼（引用者注Ⅱ謙吉）の家は青山の南町だった。彼は興奮しながら其所まで日比谷から歩いて帰つて行つた」とある。この変更は何を意味しているのか。直哉が書いた書簡の宛先を調べると、「青山の南町」には小宮豊隆が住んでいたとわかる。直哉が初めて小宮豊隆に手紙を送ったのは、明治四十五年十月三十一日付のものであるが、その住所は「本郷区森川町一番地 柳瀬方」となっている。しかし、大正六年二月五日付以降の手紙は「東京市赤坂青山南町

六丁目一〇八」が宛先となっており、作中の「青山の南町」は小宮豊隆と関係があるのではないかと推測される。

直哉は「暗夜行路」の前身であつた長篇の発表に関して、小宮豊隆と交渉を行っていた。深澤範一¹³は、「暗夜行路」の前身と思われる長篇の発表について詳細な考察を行っているが、直哉はまず『白樺』に長篇を発表しようとしていたのである。それは実現せず、次に発表先として『新小説』が浮上する。深澤は、『新小説』からの原稿依頼は永楽館止宿中であつたもので、小宮豊隆の紹介状を携えて編集人本多直次郎が志賀を訪れたのは大正元年十月三十日のことである」と述べ、「志賀は尾道で執筆中の長篇を『新小説』に発表しようとしたとしてよいだろう」としている。小宮豊隆の大正二年三月四日付志賀直哉宛書簡¹⁴には、「本多さんにあなただのお言葉を伝へたところ万事よろしいやうに取計らつて下されたの返事でございました。長い短いについては別に制限を置かないからどうぞ其辺の御遠慮はなさらずに書いて下さいとのこと、唯あんまり長くなつたら一ヶ月置き位にして二回に分載するからそれだけは含んで置いて頂きたいんださうです」とあり、この時点でも長篇の発表先として『新小説』が検討されていた様子が窺える。

直哉が生涯で『新小説』に発表した作品は、「赤西蠣太」（原題「赤西蠣太の恋」、大正六年九月）、「或る一夜」、「廿代一面」の三つである。「赤西蠣太」発表の経緯は、「和解」（『黒潮』、大正六年十月）に詳しい。「和解」の二を参照すれば、「夢想家」（『空想家』から改題）という「尾の道で独住ひをしてゐた前後の父と自分との事」を扱った小説が書けず、「空想の自由に利く材料」である「赤西蠣太」を代わりに発表したのであつた。その際、「十月号の雑誌に約束して」と語られているが、実際に「和解」が発表されたのは『黒潮』であり、『新小説』ではない。周知のように、直哉は漱石に依頼され、『東京朝日新聞』に長篇を発表する予定であつたが、のちに辞退し、執筆活動再開後に

「佐々木の場合」(『黒潮』、大正六年六月)を漱石にデディケートしている。「或る一夜」の謙吉が「青山の南町」に住んでいるという設定は、小宮豊隆に対する何かしらのデディケートを意味しているのかもしれない。長篇発表の約束を果たせず、「夢想家」が変化した(と思われる)「和解」の発表も『新小説』ではなかった。直哉のある種の義理堅さを示している設定なのではないか。

その他にも「或る旅行記」では次の場面に着目したい。

「お新さん一寸」と母は不意に調子をかへて娘の方を顧りみてから武郎の顔をながめて「時任さんによく御似なすつてだらう」いつた。／「エー」と若い細君はスナヲになぜいた。／武郎は具合悪さうに黙つてゐた。／「壬生さんは、時任さんは……？」と母は有鳴の方を向いた。

ここでは「時任」という人物の話が出ている。照子が、有島武郎を「時任さん」に似ていると言ひ、信子が同意している。「或る一夜」では、「時任さん」は「佐々木さん」に変更されているが、明治四十五年に執筆された時点で「時任」という名前が出てくることには注意したい。「暗夜行路」の主人公、時任謙作という名前について、阿川弘之¹⁾が「どういふところから主人公のあの名前をおつけになつたのですか」と直哉に尋ねたところ、「あれは学習院の上の級に時任といふ人があつたんだよ。それを思ひ出してつけたんだ」と回答があつたという。阿川は、明治中期の学習院の在校生のなかには時任静二、時任静三という二人がおり、退院の年から考えると時任静三が直哉の念頭にあつたのではないかと推測している。照子と信子が知っている「時任さん」が誰を指しているのかは不明だが、時任謙作という命名とつながりがある可能性も考えられよう。「或る旅行記」は「暗夜行路」の草稿類には分類されていないが、その成立を

考察する際にも看過すべきではない未定稿なのである。

おわりに

広津和郎は同時代評で「自分だけの記録のために、書き残して置かうとしたやうなもの」と述べているが、「或る一夜」は長篇として構想されていたのであろうか。謙吉という名前は、順吉と謙作を連想させるものであり示唆的であるが、すでに「憐れな男」(『中央公論』、大正八年四月)が発表されており、「謙作の追憶」も「或る一夜」と同時に発表されていることを鑑みると、小宮豊隆への義理から断片的な作品を発表したとみる方が実状に近いのかもしれない。とはいへ、より長い小説を構想していた可能性は否定できないであらう。「くもり日」(『新潮』、昭和二年一月)という小説は、康子との結婚を素材としており、主人公の俊吉が郁子(モデルは康子)および春子(モデルは川口武孝と康子の長女・喜久子)と京都で会う内容である。非常に断片的な作品であるが、「続創作余談」(『改造』、昭和十三年六月)には「今は何を書かうとしたか忘れて了つたが、もつと長いものを書くつもりで書きだし、厭になつてやめたもの」という言及がある。「或る一夜」が小説としてはあまりにも断片的であることは、同じような事情を示しているとも理解できる。

「或る一夜」では、女性に求婚を「断然と断られ」て、「今朝から一幕ものをかきかけては消してゐる」常道と、「若い美しい細君」と「若い洋行帰りの良人」の「月並にスキート・ホーム」な「家庭の団欒」に浸る山上が対照的に描かれている。気分の不調和を感じた謙吉が音楽から逃れるために華族会館を出て、山上の家へ向かうと、そこでもまた音楽に囲まれるというような構造もあり、短い小説ながらも技巧が凝らされている。「或る旅行記」と比較すると、より常道の失恋に同情し、山上を批判

する側面が印象づけられる内容に変化していると言える。「或る一夜」末尾と、同じ場面に相当する「或る旅行記」の内容を次に示しておく。

「常道の恋は僕等の経験から云へば（彼には洋行中の色々な経験があつた）極く初期のものだからネ。肉の關係のある女に対する嫉妬の苦痛なんでものが、どれ程のものか、そんな事は経験しないんだから、幾ら苦しいと云つた所で、プラトニックのラヴの苦しみは知れたものだよ。常道なんか幸福だと思ふな、僕は」とこんな事を云つた。聴いた時はそれはそれ程には思はなかつた。然し今彼はそれを憶ひ出すと、無闇と腹が立つて来た。（「或る一夜」）

「武者の恋は僕等の経験からいへば極く初期のものだからネ。肉の關係をした女に対するシツトの苦痛なんでものがどれ程のものか、そんな事は武者なんか経験しないんだから。いくら苦しいといつた所でプラトニックのラヴの苦しみは知れたものだよ。武者なんか幸福だと思ふな僕は」こんな事を其時いつてゐた。／それは有嶋が経験したやうなシツトの苦しみは想像はついても、今迄での武者にはたしかに実感する事は出来ないだらうと志賀は思つた。然し、同時に武者の今の苦しみも、僅に想ひ起す事は出来ても、どれ程の苦みか実際に感ずる事は今の有嶋に出来ないだらうと思つた。而してこんな事を思ふ自分は両方共に只想像するだけであらうと考へた。（「或る旅行記」）

ほとんど一致する内容であるが、敢えて比較のために長く引用した。傍線部を確認すると、「或る旅行記」では武者小路にも生馬にも実感をもって同意できない直哉の中立的な位置が示されているが、「或る一夜」では一方的な不快感へと変わっている。

しかし、再三述べているように、作中のモデルは特定できないように改変されているため、生馬への直接的な批判の意図は薄いと判断せざるを得ない。「蝕まれた友情」はデフォルメが施されたと思われる部分も多いため、過去の直哉と生馬の關係を考へる際には注意が必要である。たとえば、祖母留女の死に関して、「蝕まれた友情」では「祖母が悪く」て上京したとき、電車の中で偶然生馬と会い、つい「そのうち我孫子へ訪ねて来玉へと云つて了つた」と語られている。しかし、大正十年八月二十四日付の生馬に宛てた書簡には「君に対する僕の気持も又前とは變つてゐる、君の去年の絵がよかつた事なども其時矢張り心から嬉しく感じてゐた、／或る時僕もお訪ねするつもりだが、君も身体の具合のいゝ時来てくれ玉へ」とある。口頭ではなく手紙で伝えているのであり、意図的か否かは判然としないが、「蝕まれた友情」の文章は事実とは異なる部分もある¹⁶。

ところで、有島生馬は「蝕まれた友情」について、『文学』という雑誌に極めて簡単に、なぜ『蝕まれた友情』を読まないかを一通り弁明した¹⁷と発言している¹⁷。小谷野敦は「岩波書店の『文学』総目録を見ても生馬の文章はない」と言っている¹⁸が、生馬がその文章を書いたのは全国書房が発行していた『新文学』という雑誌である¹⁹。昭和二十二年九月の『新潮』に武者小路が「見えない苦心」という題で、「蝕まれた友情」を読んで抱いた感想を書いている。武者小路は「この小説が志賀の氣持を如実に語つてゐることを知つてゐる」と述べ、「芸術を愛して、金のことは第二、第三と心得てゐる人間と、芸術の尊いこととは知つてゐるが、それ以上に生活の楽しさを求めてゐる人間との間の感情のもつれを、この小説は如実にかいてあるやうに思ふ」と読解している。生馬はそれに対して、昭和二十三年二月の『新文学』に「友情について武者小路兄に」という題で寄稿している。直哉ではなく武者小路に宛てるという方法をとつた間接的な反論である。単行本『蝕まれた友情』が昭和二十二

年七月に全国書房から刊行されていることを鑑みると、同じ全国書房が発行している雑誌の『新文学』に生馬が文章を載せたことは、生馬なりの反論だったのではないかと思われる。生馬は「蝕まれた友情」を読まない理由として、「一旦読んでもし腹でも立てれば、僕の事だからどんな無茶を言出さないと限らないと思ひ返し、又それがため途中執筆を妨げてとも思ひ小説の完了を待つことにした」と述べている。そのあとに「多くの知人や友人」から「僕がまだ「あれ」を読んでゐないと言ふと、「それならお読みにならない方がいいでせう」とか、「読む必要はない」とか、「黙殺してもいいでせう」とか「言われたことを書いており、「落付いてゆつくり読むいい時が来て、S（引用者注）志賀」の手紙にいふ「寛大な気持で読」める日を待ちつつある」という。さらに、留学中に影響を受けた人物として湯浅一郎と山下新太郎を挙げたあとで、ゾラとセザンヌの話をしてゐる。このゾラとセザンヌの話は、明らかに直哉と生馬の関係の比喩として機能している。「セザンヌとゾラが親交を結ぶに至つたのはエクス市のブルボン中学で偶然二人が一緒になつたからで、当時セザンヌは十三歳、ゾラは一つ年下の十二歳だつた。それから三十四年間即ちゾラのセザンヌをモデルにとつたと云はれる長篇小説「制作」が出版された一八八六年の春まで、二人の友情は親兄弟も及ばない親密なものだつた」という。ゾラの「制作」について生馬は、「セザンヌは「この出来損ひの小説」を受取り、従来の親密な長文の手紙とは似もつかない極めて儀礼的な、三下り半をゾラ宛に叩きつけ」たのであると書いているが、「出来損ひの小説」や、別の箇所にある「極く平凡な頭のゾラ」という部分には、直哉への反発が含まれているのではないかと思えてならない。次の記述は最も重要である。

時代を隔て第三者からみれば、双方に誤りもあり、正し

さもあらうが、兎も角ゾラには絵画を深く鑑賞する独自の眼識はなかつたかも知れない。世評にのつてマネの芸術までは分つても、孤立無援のセザンヌの独創を本当は少しも理解してゐなかつた。この欠点こそ二人の友情にとつて致命的な重傷だつたのである。

ここで、ゾラは直哉、セザンヌは生馬を表現していることは一目瞭然である。生馬はゾラになぞらえて、直哉の絵画を鑑賞する眼識のなさこそが二人の友情を損なう致命的な重傷であつたと反論しているのである。論旨からは些か脱線したが、生馬と直哉の関係を考える上では重要な文章である。

改めて「或る一夜」に話を戻すと、「或る旅行記」から変わつていない点にも着目する必要がある。「或る一夜」の冒頭で示される常道の手紙は、武者小路の手紙とほとんど一致している。生馬ではなく、武者小路へのメッセージの方にこそ注意すべきなのかもしれない。武者小路は大正七年からは我孫子を去つて「新しき村」運動に入っている。直哉とは頻繁に手紙で連絡を取り合っているが、武者小路との関係についてはより詳細に検討しなくてはならない。

※本文およびその他志賀直哉の小説・未定稿・日記・書簡の引用はすべて『志賀直哉全集』（全二十二巻・補巻全六巻、岩波書店、一九九八年十二月〜二〇〇二年三月）に拠る。その際、ルビは省略した。

注

1 ただし、この本間と同じ文章が大正九年一月十二日の『東京日日新聞』に田中純「正月文壇評（三）」として掲載されている。本間は「私は嘗つて

- 『東京日々紙上』に次ぎのやうに書いた」と述べた上で「或る一夜」評を行つてゐるため、本稿では田中純のものではなく、本間のものであると判断した。
- 2 本多秋五「私のみた武者小路さん」(『日本文学全集17 武者小路実篤集』月報、新潮社、一九六一年七月)。引用は『本多秋五全集』第八卷(菁柿堂、一九九五年十月)に拠る。
 - 3 須藤松雄『志賀直哉の文学』(南雲堂桜楓社、一九六三年五月、のち増訂改版、桜楓社、一九七六年六月)。
 - 4 宮越勉「初期「白樺」の有島生馬と里見淳」(『明治大学人文科学研究所紀要』、二〇〇六年三月)。宮越は『志賀直哉 芸術小説を描き続けた文豪』(おうふう、二〇一八年十二月)の第V部・第三章「今後の日本は文化的一等国であり得るか——「蝕まれた友情」の文学的戦略——」でも「或る一夜」に触れており、「モデルへの配慮」により作中人物の関係が読者に掴みづらいことから、「直哉の生馬批判はこの時点ではいわば小爆発にとどまっていたとせねばならない」と述べている。
 - 5 生田長江「新年の創作」(『報知新聞』、大正十二年一月九日)。ここでの「暗夜行路」とは、大正十一年七月に新潮社より刊行された『暗夜行路 前編』が想定されていると思われる。中村星湖「新年の創作」(『読売新聞』、大正十二年一月十日)でも「暗夜行路」と極めて似寄つた材料で、或は全然同一物と言つてよいかも知れぬ」と評されている。
 - 6 引用は『伝記叢書32 高島先生教育報国六十年』(大空社、一九八八年三月)に拠る。
 - 7 梶谷崇「白樺派における西洋音楽受容——柳宗悦と田村寛貞を中心に——」(『有島武郎研究』、二〇〇七年三月)。
 - 8 「ラスト・ローズ・オブ・サンマー」、「ホーム・スキート・ホーム」に関して堀内敬三・井上武士編『岩波クラシックス18 日本唱歌集』(岩波書店、一九八二年十二月)および松村直行『童謡・唱歌でたどる音楽教科書のあゆみ——明治・大正・昭和初中期』(和泉書院、二〇一一年十一月)を参考にした。
 - 9 両曲とも歌詞および訳詩の引用は、作品発表時を鑑みて、櫻井役訳註『中学英詩選』(博文館、大正九年三月)に拠つた。
 - 10 原田家については、主に松田敬之『華族爵位』(講談社現代新書、二〇〇九年八月)、『歴史読本・特集 華族 近代日本を彩つた名家の実像』(二〇一三年十月)一七六・一七七頁を参照した。また、華族史料研究会編『華族令嬢たちの大正・昭和』(吉川弘文館、二〇一一年五月)も参考にした。
 - 11 鷗外と原田直次郎の関係は新関公子『森鷗外と原田直次郎 ミュンヘンに芽生えた友情の行方』(東京藝術大学出版会、二〇〇八年二月)に詳しい。
 - 12 目野由希「昭和期における有島生馬試論」(『国文学論輯』、二〇〇八年三月)。
 - 13 深澤範一「志賀直哉の作家意識と「単調」という小説——「暗夜行路」前史ノート」(『横浜国大語研究』、一九八八年三月。のちに池内輝雄編『日本文学研究資料新集21 志賀直哉・自我の軌跡』、有精堂出版、一九九二年五月に収録)。
 - 14 小宮豊隆の引用は『志賀直哉宛書簡』(『志賀直哉全集』別巻、岩波書店、一九七四年十二月)に拠つた。その際、適宜旧字を新字に改めている。
 - 15 阿川弘之『志賀直哉 下』(岩波書店、一九九四年七月)の七・八頁。
 - 16 ただし、「蝕まれた友情」ではその後、生馬から手紙があつたと書かれており、その手紙の内容は一致している。大正十年八月三十日付の直哉に宛てられた生馬の手紙には、二十四日の手紙の返事として、「先達君の返事を拝見した そばに居た信子も拝見して 嬉しいでせうと口に出して云つた うんと僕は答へた」(引用は『志賀直哉宛書簡集 白樺の時代』、岩波書店、二〇〇八年九月に拠る)と書かれている。
 - 17 有島生馬『思い出の我』(中央公論美術出版、一九七六年九月)の九五頁。
 - 18 小谷野敦『里見淳伝——「馬鹿正直」の人生』(中央公論新社、二〇〇八年十二月)の三二七頁。
 - 19 武者小路「見えない苦心」および生馬「友情について武者小路兄に」については、すでに町田栄「有島生馬」(『志賀直哉宛書簡集 白樺の時代』解説、前掲)に指摘がある。